



地域日本語教室 ^{キズナ} KIZUNA
地域日本語教育コーディネーター
李 ^{りけん} 妍 さん (35歳)

現在、市内には外国人市民が500人以上暮らしており、その多くは日本で技術と知識を学ぶ技能実習生だ。外国人市民が、生活に必要な日本語や日本文化、地域の情報などを学び、地域住民と交流する場として令和3年度から「地域日本語教室 KIZUNA」が開催されている。

学習者（外国人市民）に日本語を教え、学習者や地域日本語サポーター（日本人サポーター）、企業の間で立つて教室を運営する、地域日本語教育コーディネーターの李妍さんに話を聞いた。

絆のある教室、
絆のあるまちを目指して

「KIZUNAは、外国人市民が日本語を学び、地域とつながるきっかけになっています」。

そう話すのは、市が主催する地域日本語教室 KIZUNA で、地域日本語教育コーディネーターを務める李妍さん。

中国出身の李さんは、高校生のときに見たテレビドラマがきっかけで日本に興味を持ち、「文化や言語で共通点も多い日本をもっと知りたい」と、大学で日本語教育を専攻。日本へ留学後に県内企業に就職、結婚を機に小林市に移住した。

現在、市内には500人以上の外国人市民が暮らしているが、交通手段に限られており、職場やスーパーなどの限られた場所で活動せざるを得ないと李さん。「都会ほど外国人を見かけないので、まちで見かけて違和感を持つ人もいるのではないかと思います」。

日本人市民と外国人市民が理解し合い、国際社会に開かれた住みやすいまちにするためには、「一人ひとりの力が大切」だという。

身近なところに外国人市民がいたらどう付き合うのか、近所や職場の日本人市民とどう付き合うのか、それぞれが具体的に想像してほしいと李さんは話す。

「想像できたら、あとは相手を尊重して相手の立場で問題を考えたり、困っていたら助けてあげるという、人と人との付き合いの問題です」。

小林市はやさしい人が多いまちだと感じると李さん。これからも「絆のあるまち」であるために、まずは参加者同士のつながりが生まれる「絆のある教室」にしていきたいと話す。

目指すのは、外国人市民だけでなく、日本人サポーター、そして講師にも学びのある教室だ。

李さんとともに KIZUNA を運営する市の国際化推進コーディネーター満留由紀子さんは「李さんは日本人市民と外国人市民どちらにも寄り添える人」だと話す

KIZUNA の教室では、学習者（外国人市民）が日本語や日本の文化を学ぶだけでなく、自身の出身国の言葉や文化を他の参加者に教える場面も見られる



小林人

こばやしびと
Vol.111